

T₃, T₄ および P₂, P₃ の比率が高く, また Secretary component (SC) は 22.7% に陽性であった。

〔考察〕: 1) レ線学的に空洞形成・胸膜陥入を伴う末梢部腫瘍をみた場合扁平上皮癌を疑う必要がある。2) 末梢発生腺癌と比較し, 特に p 因子は重要で腫瘍局所進展が予後に影響をおよぼすものと思われる。3) 腺癌類似の病理形態学的特徴, SC の陽性所見等から肺門発生扁平上皮癌と質的に異なる可能性がある。

10) 中心にほとんど瘢痕形成のない肺腺癌の病理学的検討

江村 巖 (新潟大学附属病院 病理部)

渡辺 恒 (岡第二病理学教室)

我々は瘢痕形成のない肺腺癌症例を経験したので, 瘢痕の少ない腺癌及び Atypical alveolar cuboidal cell hyperplasia (AAH) を含め検討した結果を報告する。瘢痕の程度, 癌細胞の分類は下里等の分類に従った。気管支上皮細胞やクララ細胞への分化を示す細胞からなる腫瘍の場合腫瘍の周辺部分でも腫瘍の中心部分でも間質に沿って増殖している腫瘍細胞の核の面積はほぼ同じであった。しかしこれとは別に胸膜の陥入のある部位ではクララ細胞への分化を示す細胞から成る癌と判断できる領域があるが周辺部では AAH と病理組織学的に鑑別できない部位がありこの間に形態学的な移行のある症例があった。このような症例の腫瘍周辺部の腫瘍細胞の核面積は平均 30 μ m², 中心部では 50~70 μ m² であり危険率 1% 以下で有意差があった。さらに AAH の細胞の核面積の平均値もほぼ 30 μ m² であった。このことは後者の腫瘍が AAH を発生母地としていることを示唆しているものと推定された。

特別講演

肺癌における内視鏡的治療

国立がんセンター放射線治療部

小野 良祐 先生

第18回新潟救急医学会

日時 平成元年 7月15日 (土)

午後 2時より

会場 新潟大学医学部大講堂

一般演題

1) 硫酸マグネシウムが有効であった心室頻拍の2例

三井田 努・本多 拓 (新潟市民病院 救命救急センター)

庭野 慎一・小田 弘隆
佐藤 広則・樋熊 紀雄 (同 循環器科)

硫酸マグネシウム (MgSO₄) 静注が有効であった薬剤起因性 Torsades de pointes (Tdp) の2例を経験した。症例1は79才女, PSVT による心不全のため入院。PSVT は af に移行し, Verapamil, Procainamide 経口投与により接合部調律となったが, QT 間隔が 0.60 秒に延長し, Tdp が頻回に出現した。血清 Mg は 2.0 mg/dl と正常であったが, 薬剤起因性 Tdp と診断し MgSO₄ 2.47g 静注した。QT 間隔の短縮はなかったが, 投与直後より Tdp は消失した。症例2は71才男, af のため Disopyramide 300mg の投与を受けていたが, 心不全のため入院。Digoxin 投与後, 接合部調律となり, QT 間隔が 0.55秒と延長し, 単形性持続性心室頻拍と多形性心室頻拍が出現した。薬剤起因性 Tdp と診断し, 直流除細動後, MgSO₄ 2.47g 静注した。投与後, 心室頻拍の再発はなかった。2例とも Mg 投与による副作用はなかった。薬剤起因性 Tdp の治療に MgSO₄ が有効かつ安全と考えられ, 緊急治療に有用であると思われた。

2) 気管・気管支外傷の4例

吉谷 克雄・広野 達彦
小池 輝明・滝沢 恒世
矢沢 正知・大和 靖
中沢 聡・江口 昭治 (新潟大学第二外科)

吉川 恵次 (新潟大学附属病院 救急部)

桜井 淑史・青木英一郎 (新潟市民病院 第二外科)

交通外傷による頸部気管断裂の2例, 気管・気管支断裂の1例, 小児の気管支損傷の1例を報告する。いずれも外傷後の呼吸困難, 皮下気腫, 気胸などの症状で発症し, 気道確保のための気管切開, あるいは気管支鏡にて確診を得た後, 手術により救命した。

外傷性気管・気管支の損傷は稀であり, 合併する他臓